

私たち上智大学地球環境学研究科（教員 2 名、学生 11 名）は、ユネスコ世界自然遺産である奄美大島でフィールドワークを行いました。学生は「エコツーリズム」「環境文化」「SNS」の 3 つのグループに分かれ、教員からの指導を受けながら、各自の視点から課題を探究しました。

9 月 12 日（1 日目）

奄美大島に着いて、チームのスタート

9 月 12 日は、チームの集合と翌日の準備が中心となりました。18:00 頃に奄美大島空港に到着後、名瀬市内のファミリーレストランで夕食をとり、夜に宇検村の宿泊先へ移動しました。

宿泊先に到着後、早速メンバー同士の顔合わせとミーティングを行いました。コミュニケーションもスムーズに始まり、リサーチの質問項目やタスクを再確認し、グループごとに詳細を詰めました。その流れで、豊年祭についての事前学習も行いました。収穫を祝う祭りであること、コミュニティの繋がりが重要である一方、近年は若者の減少という課題があることなどを共有しました。最後に、2 日目のスケジュールなど時間管理についても確認し合いました。まだ会って間もないメンバーたちが自然に協力し合う、良いチームワークが生まれました。

9 月 13 日（2 日目）

豊年祭前の環境整備と集落の風景・食文化体験

午前はず集落の環境を学びました。住民の方の案内で集落を歩き、動植物を観察しました。例えば、グアバの木を見つけ、成熟の見分け方—実が黄色く柔らかくなる頃—や、皮をむいてそのまま食べる食べ方を教えてもらいました。

次に豊年祭の準備作業を集落の方と一緒に行いました。除草をしたり、テーブルや椅子を並べたりしながら、住民の方々とコミュニケーションを取りました。短い時間で晴れから雨へ天気が何度も変わり、島の天気の特徴を体感しました。休憩の合間に、グループでインタビューを行いました。エコツーリズム班は観光への期待などについて、環境文化班は文化の継承などについて、SNS 班は情報発信の課題などについてそれぞれヒアリングを行いました。住民の共同作業の様子から、伝統と環境の維持への向き合い方を感じました。

昼には島の風景を眺め、食文化体験をしました。美しい風景だけでなく、美味しい食べ物からも、里海の豊かさを体感しました。住民が振る舞ってくれた料理をいただきました。ソテツ粥は蘇鉄の果実を毒抜きして煮込んだもので、独特の風味が昔の知恵を表します。皆で歓談し、午前の疲れを癒しました。

昼食はお弁当以外にも生勝集落の皆さんが作ってくださったご飯もいただきました。狩りで獲ってきたイノシシをご自身で捌いて作られたイノシシスープ、調理された巻き貝などどれも初めて食べたのですが、非常に美味しかったです。特にイノシシスープはイノシシ独特の臭みが全くなく、食べやすくてとても美味しかったです。集落の皆さんと日本航空の方々、上智の学生みんなで歓談し、和やかで優しい空間でのひと時を過ごせました。



イノシシスープ



赤飯のようなおかゆのようなご飯



巻き貝



奄美大島 紅さんごソーダ(お酒です)

自然溢れる景色に感動し、写真も沢山撮りました。水が透き通っているので泳いでいる魚も見ることができ、珍しいフグも見ることができました。東京ではなかなか見られないので興奮しました。



昼食を食べた後は、希望する学生を集落の方が船に乗せてくださりました！スピードが速くて少し怖かったけど、景色が綺麗で風も気持ちよくて最高でした。



夕焼けもとても綺麗で思わずうっとりしてしまいました…！

生物観察のナイトツアー

帰りの車はみんなクタクタでした。今日はもう寝るだけ！とはならず、なんと夜に役場の方がクロウサギナイトツアーをしてくださるとのこと、疲れ果てていたみんなも見違える程元気になりました。夕食を食べて、お風呂も済ませた後、1台のバスでナイトツアーに行きました。



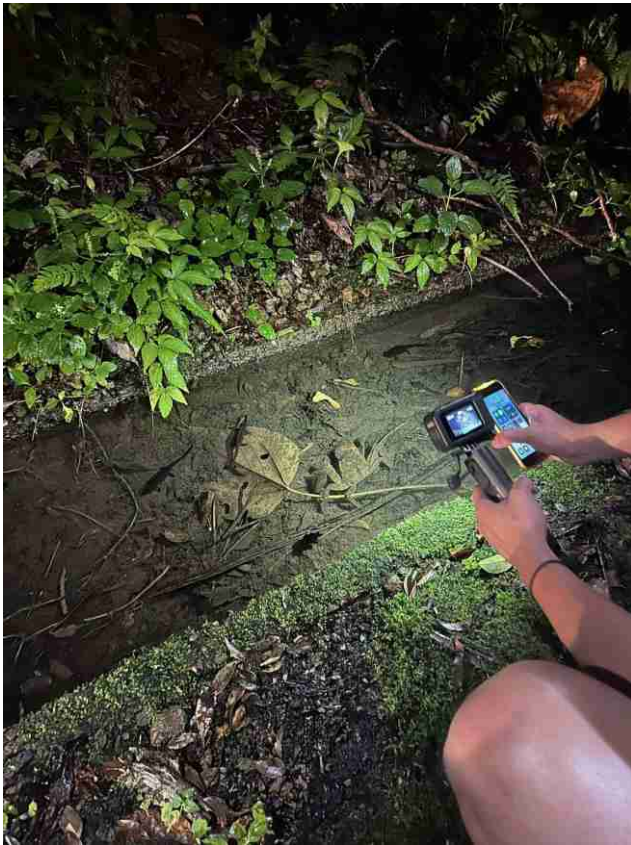
車の中からの景色

さっそくクロウサギと遭遇しました。クロウサギは夜行性で夜の間に活発に動き回ることです。足が短くて動くのも遅く、鈍くさいところも含めてとても可愛かったです。



クロウサギ

他にも道端に珍しいカエルやカニ、トカゲがいて、驚きと興奮の連続でした。普段過ごしていると、こんなにも野生動物に巡り合う機会がないので、改めて人間は生物と共存しており大事に守らなければという想いになりました。



水の中に潜む生物たち



ちょこちょこと道路を渡っていたカニ



サガリバナ

おまけでお気に入りの写真の紹介なのですが、こちらは幻の花サガリバナです。花言葉は『幸福が訪れる』で、一夜しか咲かない花なのです。本記事を見てくださった皆様に幸福が訪れるよう、願いを込めてご紹介させていただきました。

9月13日の生勝集落での活動は、伝統行事の準備を通じてコミュニティのつながりを強め、自然風光の穏やかな広がりを見ながら、食文化の温かみを共有する一日でした。除草や椅子の配置といった共同作業で住民の方々と力を合わせ、里海の世界―人間と海洋の共存―が日常に溶け込んでいるのを実感しました。昼の歓談では、地元資源を活かした料理が、持続可能な生活の知恵を伝え、皆の笑顔を繋ぎました。夜のナイトツアーでは、島の生物多様性に触れ、夜行性の生き物たちの静かな動きが、人と自然の調和的な共存を教えてくれました。この絆の深さが、集落の強靭さを支えているのがわかりました。明日への期待が膨らみ、豊年祭でこれらの学びを祭りの喜びに変えられそうです。

9月14日（3日目）

豊年祭の日

昨日一日をかけて行った掃除や準備が実を結び、会場の設営はほぼ完了しました。しかし、奄美の雨と晴れが交互に訪れる島の天気ゆえ、本格的なお客を迎える前に、落ち葉や部分

的に残った水たまりなどの手入れが必要でした。老若男女を問わず、今日の行事に対する皆の期待がひしひしと伝わってくるようです。



朝の清掃を終えた後、学生は地元の子どもたちと一緒に親子活動を始めました。これはグリアさんが考え出した活動で、地元の子どもたちと一緒にブレスレットを編むというものです。私はこれはとても素晴らしい活動だと思っています。中国では、端午の節句などの伝統的な行事で子どもたちが五色の糸で編んだブレスレットを身につける習慣があり、それは邪気を払い幸運をもたらす意味があるとされています。日本にはこうした風習がないかもしれませんが、私にとっては同じような意味合いを持つものを感じられました。



豊年祭で披露する出し物の準備も行いました。私は中国の伝統的な民俗歌曲を準備し、方さんや塩谷さんなどは中国各地の早口言葉を披露することにしました。私たちの研究科には中国人が多く、中国各地の方言や早口言葉の表現方法も様々です。この出し物は、中国の多様な地域の言語文化の面白さを表現することを目的としています。多文化交流の一つの形と言えるのではないのでしょうか。出し物を披露する際には、会場の地元住民とのやり取りもあり、とても楽しく、私たちと地元住民との距離を縮める良い機会となりました。



豊年祭が本格的に始めると、男子学生は相撲の廻しを着用し、準備場所から独特の歩き方で会場まで進んで行きます。これは儀式の一環です。女子学生も同様に、伝統衣装を身にまとい、スタート地点から特有の舞踏歩きで会場に入ります。廻しを着ける前は、多少の緊張や恥ずかしさを感じるかもしれませんが、その場の空気の中では、むしろ廻しを着けていない人の方が場違いに映ってしまうかもしれません。これこそが文化の伝播力なのでしょう。その風習の中では地元の習慣を尊重し、自らを地元住民のように見立ててその文化に溶け込むこと——それが最も深い文化体験なのだと実感しました。



相撲のコーナーは予想以上に盛り上がりました。まず学生が住民の中から対戦相手を選びます。私は以前スポーツ選手としての経験があったため、相撲の経験はなくても、身体能力（主に体重のアドバンテージのおかげで）を活かして一人の村民に勝利することができました。しかし、相撲経験の豊富な住民と対戦した時には敗れてしまいました。ともあれ、この男性同士の肉体をぶつけ合う熱い戦いは非常に刺激的で、相撲をしている最中は、より一層地元の文化に馴染んでいるような気持ちになりました。二日目に一緒に酒を酌み交わした日本の大先輩が「ぜひまた来てほしい、この場所を気に入ってくれるといいな」とおっしゃっていたのが印象的です。この文化が与えてくれた新鮮な体験は、確実に私にもっとこの地の魅力を知りたい、またここを訪れたいという気持ちをかき立てました。

相撲の後は、地元住民による様々な出し物を楽しむことができました。年配者も若者もそれぞれに演目を披露してくれましたが、若者の参加は確かに少ないように感じました。これは二日目のインタビュー内容——文化活動における若者の参加の難しさや、現代の若者の意識——を思い起こさせました。活動の継承が難しくなっているのは残念なことです、多くの人にとっては仕方のない面もあるのでしょう。この点については、私たちがより深く研究していく必要があるかもしれません。



一日の活動が全て終わった後は、住民と研修生が一同に会する懇親会が開かれ、和やかな雰囲気になりました。皆がこの機会を大切にしていることがひしひしと伝わり、学生と住民と一緒に歌を歌い、楽しみました。地元住民は、誰かが歌を披露している時には盛り上げ役として場を沸かせてくれました。

最後に、関西から移住してきたという奄美の小学校の先生にインタビューする機会がありました。奄美に移住した理由を尋ねると、「この雰囲気がとても気に入っている。自由で、公平で、子どもたちも可愛い。人付き合いが苦手な自分にとって、奄美に移住してきたことはとても幸せな選択だった」と教えてくれました。

9月15日（4日目）

トレッキング・湯湾岳登山

宇検村役場の職員の方の先導のもと、奄美の森の中をトレッキングしました。熱帯地域にのみ生息する植物をいくつか観察することができました。森の中の道は舗装されておらず、自然の姿がそのまま残っていました。道が滑りやすく、急な斜面も多かったので、互いに手を取り合いながらみんなで協力して進んでいきました。森を流れる川の水は非常に透明度が高く、少し飲んでみると甘みがあってとても美味しかったです。



その後、湯湾岳に登るため、車で移動しました。湯湾岳（ゆわんだけ）は奄美群島で最も高い山で、標高は 694 メートルです。奄美群島国立公園の中でも最も厳しく保護されている「特別保護地区」に指定されています。

私たちは駐車場から山頂まで湯湾岳を登りました。歩行時間は約 5 分ほどで、途中はさまざまな形の階段が整備されていました。朝に雨が降っていたため階段が少し滑りやすく、注意しながら進みました。しかし、山頂までの道のりはとても美しく、奄美大島特有の植物が数多く見られました。さらに、たくさんの蝶やトンボ、色とりどりの花も咲いていて、とても印象的でした。山頂に到着すると、目の前には素晴らしい景色が広がっていました。奄美大島全体や海、いくつかの集落を一望できるパノラマの眺めは、まさに息をのむ美しさでした。下山の途中では、偶然とてもかわいらしい小さなへびを見ることができました。そのへびの体は鮮やかなエレクトリックブルーで、思わず見とれてしまうほど美しかったです。



環境文化の講演

午後には一般社団法人巡めぐる恵めぐる代表理事の新元一文さんが奄美の環境文化に関する講演をしてくださりました。奄美の歴史や八月踊り・豊年祭・唄などの文化について丁寧に教えていただきました。特に奄美では北と南で文化が違うという話が印象に残りました。奄美は琉球王国と薩摩藩に支配されていた歴史があります。琉球王国の支配下だったときは南側が、薩摩藩の支配下だったときは北側が拠点となっていたため、文化に違いが生じたそうです。奄美は独特な歴史を辿ってきた島であることが実感できました。また、新元さんが奄美の唄を歌ってくださりました。初めて聴いたのに、どこか懐かしく、自分の故郷を思い出したような気持ちになりました。改めて奄美の唄の不思議な魅力を感じることができました。その後、新元さんは私たちの質問や個別のインタビューにも快く応じてくださいました。予定の時間を過ぎても、終始優しく丁寧に対応してくださった新元さんに、この場を借りて心より感謝申し上げます。

プレゼンテーション資料作成

夕方、ホテルに戻った私たちは、翌日の発表に向けてプレゼンテーション資料の準備を行いました。私たち環境文化班は研究テーマについて宇検村でさまざまな方にインタビューを行っており、その音声を日本語に書き起こし、さらに英語に翻訳する作業をしなければなりませんでしたが、少し時間がかかりましたが、何とか終わることができました。その後、これらのインタビュー内容を分析するために、それぞれの回答の共通点や相違点を整理しました。そして翌日の発表に向けて、まず英語でパワーポイントを作成しました。そこでは、私たちの研究テーマ、その意義、インタビュー質問の内容、そして得られた結果について説明しました。最後に、その英語のパワーポイントを日本語に翻訳し、翌日の村役所での発表に備えました。

9月15日（5日目）

成果報告会

村役場にて、SNS 班・環境文化班・エコツーリズム班のそれぞれが研究成果の報告を行いました。各班とも、前日の夜遅くまで準備を重ね、研修中の現地調査から得られた成果や提案を発表することができました。お忙しい中、村長をはじめ村役場の職員の方々が聞きに来てくださり、大変ありがたく思いました。私たち自身、この奄美研修を通して多くのことを学んだため、その感謝の気持ちを込めて報告できたことがとても嬉しかったです。

タエン浜

報告会の後、少し時間が空いたので、美しいビーチとして有名なタエン浜に行きました。海は透き通るようにきれいで、白い砂浜が広がっていました。何人かは短時間泳ぎに行き、

岸の近くでは小さな魚が泳いでいるのも見ることができました。滞在時間は短かったものの、次の行程へ向かう前の、とてもリラックスできて気分がリフレッシュするひとときとなりました。



マングローブ観察

私たちは奄美大島のマングローブを訪れ、橋の上からその景色を眺めました。カヌーには乗らず、マングローブを間近で見ることはできませんでしたが、それでも景色は信じられないほど美しかったです。上から見下ろす風景はとても穏やかで印象的でした。次回は、もっと近くで観察したり、地域のアクティビティに参加したりして、このマングローブの美しさと独自性をより深く体験してみたいと思いました。



環境省の方による講義

講義では、奄美大島に生息する多くの動植物が固有種であり、つまりこの島にしか存在しないということを学びました。例えば、アマミノクロウサギはその古い系統から「生きた化石」と呼ばれています。

奄美の自然環境は、亜熱帯の雨林地形、常緑広葉樹林、川、マングローブなどが密接に関わり合い、生物多様性を支えています。私は、人間の活動や外来種がこの生態系に脅威を与えているという話に強く心を打たれました。特に、ハブの駆除のために導入されたマングースが、結果的にアマミノクロウサギや他の在来動物を危険にさらしてしまったという例が印象に残りました。

世界遺産センター訪問

空港へ向かう前に、最後の訪問先として奄美世界遺産センターを訪れました。私たちは体験型の展示館を見学し、スタッフの方から奄美特有の生き物や、絶滅の危機にある種についてお話を伺いました。代表的なものとして、アマミノクロウサギ、イノシシ、ハブなどが挙げられます。中でも印象に残ったのは、アマミノクロウサギの耳が短い理由に関するお話でした。アマミノクロウサギは外敵がほとんどいなかったため、敵を察知するための聴覚が発達する必要がなく、耳が短いままです。また、奄美と同じ緯度に位置する他の地域が砂漠である一方で、奄美は唯一の緑豊かな地域であるという興味深い話も伺いました。スタッフの方の丁寧な説明を通して、奄美がなぜ独自の自然環境を持ち、特有の動植物が根付いているのかを学ぶことができました。

